

## 前口上

本号の特集は「わかやま未来学」です。——と、このように申し上げることで、どの程度の皆様の注目を本誌が惹き、その関心を集めることが叶いますやら、はなはだ心許ない限りではありますが、そもそも「わかやま未来学」とは今年度（平成28年度）より、和歌山大学（以下、本学）で新たに開設されるに至りました、教養科目の授業名称です。そして、この授業は教養科目と致しましては、本学の歴史上初の、ほぼ必修科目に準ずる扱いを受けている授業であり、本学に入学した学生諸君には、それぞれの所属学部を問わず、この授業か、もしくは「わかやま」学群の中に位置付けられている、いずれかの科目を卒業年次までに履修して、本学を卒業することが求められています。その関係上、この授業の担当者には、本学の教養教育を取り纏めております「教養の森」センターの教員が当たり、この授業を一年を通じて、前期も後期も、引き受けることになりました次第です。

従いまして、今回の年報は直接的には、この「わかやま未来学」という新設科目を担当し、さまざまな試行錯誤を一年間、繰り返して参りました教員を中心にして、その取り組みを通じて浮かび上がり、有り体に申し上げれば……悩まされるに至りました、それぞれの思いを具体的な形にする、という方針で編まれています。ですから、そこには当然、この授業と密に関わり、産み出された論稿もありますし、そのような悪戦苦闘の跡を表面的に留めていなくても、その名の通りに「わかやま」の未来を慮るという姿勢で、ある特定の切り口から物された論稿もあります。が、少なくとも、この授業名称からも察しが付きますように、この授業の扱っております問題は、単に一授業科目の枠の中に納まりの付くものではなく、むしろ本学の全構成員が、教員も職員も学生も含めて、真摯に受け止める必要のある、受け止めなくてはならない課題であることが、見逃されてはなりません。

願わくは、この小冊子が皆様の、お手許に届くことにより、このような課題に本学の構成員の一人でも多くの方が注目し、関心を持って頂けますことを、切に望んで止みませんし、それが幾分なりとも実現する運びに至りますならば、これに勝る喜びはありません。なお、世間には「三号雑誌」という言い回しもありますように、それ相応の意図や目的や熱意を抱いて、ひとたび刊行され始めました小冊子ではありましても、いわゆる諸般の事情によって、わずかな期間で廃刊の憂き目を見ることも少なくありません。——実際、本誌も昨今の社会情勢や、大学を取り巻く困難な状況下で、はたして次号も日の目を見るのが叶いますやら、どうやら、予断を許さない事態に立ち至っております。この点も、この場を借りて皆様には、お伝えをしておく方が得策であろうと思い、いささか場違いな物言いとはなりましたが、あえて前口上の中に、書き留めさせて頂くことに致しました。